

平成25年(ワ)第38号

「生業を返せ、地域を返せ！」福島原発事故原状回復等請求事件

原告 中島 孝 外

被告 国, 東京電力株式会社

意見陳述書

平成25年9月10日

福島地方裁判所民事部 御中

氏名 村松 恵美子



私は、現在、相馬市の市議会議員を務めています。これまで、市議会議員として、医療、福祉、子どもの問題を中心に取り組んできました。また、私は、ひまわりの家という障害者施設の運営にもたずさわっています。

原発事故が起きた後、やっと神戸在住の息子と電話がつながると、息子は、私に神戸へ避難するように言ってきました。私は、「私は市議会議員であるし、支援している障害者の人達も抱えている。それはあり得ない。」「障害者の人達を置いてゆくわけにはいかない。」「国の避難指示が出ない限り、責任をもってここにいるしかない。」「答えました。もし避難するならば私は一番最後でなければならぬ、という思いがありました。息子は泣いていました。が、最後には「わかった」と相馬にとどまることに了承してくれました。このように私は市議会議員であり、また、支援している障害者の人達をたくさん抱えており、私には責任がありますので、避難することはできませんでした。自分の健康に対する不安はもちろんでした。不安はありましたが、

私は避難することはできないのですから、どうにもできませんでした。

また、原発事故が起こってから、ひまわりの家の入所者の方々からも、「放射能は大丈夫なのか」「水を飲んでもいいのか」といった放射能に対する不安の声がありました。しかし、障害者の人達は避難したくても一般社会では受け入れてもらえません。避難したくてもどこにも行き場所はありません。そのことは入所者自身が一番よくわかっています。だから「行くところがないから避難できないね」というのが話の落しどころになります。入所者の方々は納得してとどまったわけではありません。避難することはできなかつたのです。

3月14日頃のことです。原発事故による避難指示に伴い、避難指示区域内の病院が全て閉まってしまったということがわかりました。私の住む地域には避難指示区域内にしか精神科の病院はなく、避難指示により病院が閉鎖されたことにより、薬が入手できなくなっていました。精神障害の方は薬がないとどうなってしまうかわかりません。私は、本当に危機的な状況だと思っていました。あときは本当に追い詰められていました。このまま薬が入手できなければ勝手に病院に入って薬を強奪せざるを得ないということも真剣に話し合われていました。そのくらい切羽詰まっていました。私は、薬、薬、と市や県に対して必死で騒ぎまくり、薬の手配を強く求めました。今回の原発事故で、原発が一度爆発すれば、避難指示区域の地域医療はすべてストップしてしまうということがよくわかりました。

原発事故後、ひまわりの家は、避難を余儀なくされた障害者の方をばたばたと何十人も受け入れてきました。避難所では受け入れてもらえず、行き場所のない方であったため、断るわけにはいきませんでした。地震や津波だけなら、これほどたくさん避難者は出なかつたと思います。原発事故は、広範囲に、地域全体の人を対象に、避難を余

儀なくさせるものです。障害者のような弱い立場の人々は、緊急時において、避難所でも受け入れてもらえず、行き場所がなくなってしまうのです。

また、避難指示のない区域の障害者の人達は、避難したくても、多数の障害者の人達を移動させる手段はありません。多数の障害者の人達全員を受け入れることができるなどありません。障害者の人達は、理解して支援してくれる人がそばにいないければ一人では暮らしてゆけません。一般社会では受け入れてもらえません。障害者の人達は、避難したくてもできないのです。私はそのことを一番強調したいです。今回の原発事故で、事故が起こったときの、社会的に弱い立場の人達へのフオロー体制が全く整えられていなかったことが明らかになりました。

また、私は、市議会議員という職業柄、市民から原発事故による被害の話をよく聞きます。子どもをもっている親は、「本当なら避難をしたいが、避難をすれば生活を担保できない。」「でももし将来自分の子どもが病気になったら、親として自分を責め続けるのだろう。」と、多くの方が言っています。食べ物も、畑でとったものは食わず、野菜も買って食べている、水も買って飲んでい、という声も普通によく聞きます。山に登れなくなったという声もよく聞きます。山菜が採れなくなったりという声も聞きます。多くの市民は、生活の上で、常に放射能のことがどこかで気になってしまっています。一見普通に暮らしているようでも、明らかに事故前とは生活が変わってしまいました。

私個人のこと言えば、孫が相馬に遊びに来ても、健康のことを考え、長くは滞在させられなくなりました。また、ふきのとうなどの山菜が大好きでしたが、採らなくなりました。山菜を採って人にあげて喜んでもらうのも好きでしたが、できなくなりました。また、山の中

を自然を見ながら歩くのが好きでしたが、それもできなくなりました。山は線量が高いため人が入らなくなり、草刈りなどの管理が行き届かなくなり、荒れてしまっています。身近に親しんできた自然が失われてしまいました。これはお金には換えられないものです。人間として大切なものが失われたのだと思います。

低線量被ばくの中の生活がどんな影響があるのか誰も証明できません。チェルノブイリでは10数年後になってから障害をもつ子が生まれることが増えたと聞きます。20年後、30年後、いつどんな影響が出るかわかりません。危険性がわからないということ自体が不安です。

国や東京電力は、今回の事故の処理も何も全くできていません。見通しもついていません。除染についても具体的な方法が何もわかっていません。そういう中で、再稼働などあり得ないことです。原発は、たとえ事故が起こったとしても、責任をもって完全に管理・把握し、障害者のような弱い立場の人も含め、市民を完全にフアローできる体制が整っていない限りは、動かすべきではありません。再稼働は、人間の感情・命を全く無視しています。こういった、人を大事にしないやり方をする国・政治には将来性はないと思います。東京電力にしても、不祥事の始末をきちんとできないような企業には将来性はないと思います。

私は、今ここに暮らし、これからもここで暮らしてゆく子供達、そしてこれから生まれてくる子供達のことを心配しています。

以上